

大会に向けて苦勞したことはありますか？（大会に向けてどのように取り組んだか、またテーマを選択するに至った背景についてなど）

議論の環境づくりです。

ゼミ開始当初、私たち石田ゼミ2班は知り合いはいたもののお互いがほぼ初対面でした。ですから、議論すらままなりませんでした。私は大会での賞獲得を目標にしていたので、そのために何が必要かを考えました。その結果、お互いに本音でぶつかり合うことができ、遠慮のない議論が出来る環境が必要だと考えました。大会では、チームで一つの研究をまとめ上げ、成果を発表する必要があるため、メンバー間の合意形成が必要です。こうした考えから、私は議論の環境づくりに取り組みました。しかし、議論の環境づくりは簡単なものではなく、とても困難なものでした。

大会の本番はゼミ活動が本格的に始動した約8ヶ月後にありました。つまり、わずか8ヶ月の間に議論の環境づくりをおこない、競合校に勝てる研究をしなくてはならなかったのですが、思うような議論の環境づくりはできませんでした。賞の獲得を優先した結果、理想の環境づくりは出来なかったのです。理想の環境とは、全員が遠慮なく自らの考えをぶつけ合えるものでしたが、全員が「遠慮なく」というのは達成できませんでした。最も大きな理由はメンバー間の温度差にあると考えています。私は賞の獲得を優先した結果、メンバー間の温度差を埋めることができなかったのです。

私はメンバー全員が遠慮なく議論できるように、三つのことを実行しました。一つ目は雑談やプライベートの交流による関係性の構築。二つ目は相手の考えを理解し肯定すること、議論の中での問いかけによる発言の土壌づくり。三つ目は本音や感謝を伝えることによる温度差の解消。以上の三つの行動によって、遠慮がなく議論できる環境を作ろうと考えました。結果として、三つ目は完全に達成することができませんでした。

チームで活動する上で、メンバー個々の能力差は必ず現れます。大切なことは自分の能力が発揮できる場所を見つけ、できることを考えた上で自信を持つことです。先述したように、私は多様な観点から議論を進めることが重要だと考えています。1人での作業であれば能力は最も重要ですが、チームでの作業では話は別です。つまり、チームとしてより良い結果を出すためには多様性をもたらすことに意味があるのです。しかし、私は賞の獲得を優先した結果、多様性をもたらすことが重要という考え方の共有が十分に出来ませんでした。議論を急ぎ、自分の能力を過小評価すると同時に自信をなくすメンバーに対応できなかったのです。

お伝えしてきたとおり、私が最も苦勞したのは議論の環境づくりです。最終的に、賞獲得は出来たものの最後まで議論の環境を整えることには苦勞しました。しかし、私は満足しています。苦勞する中で、賞獲得に向けて本気で議論する日々を過ごすことができました。そして最終的には、お互いを想って泣くことができ、賞獲得時はお互いを本気で讃えあうことができる最も大切な仲間になりました。それは目標の達成よりも嬉しく誇らしいものだと感じています。